

#### 04 生きて証しが刻まれた絵画（ハンセン病）

（ナレーター）皆さん、いかがお過ごしですか。福岡市がお送りする「こころのオルゴール」の時間です。今日は私、松岡はながお届けします。

5

熊本県にある国立ハンセン病療養所・菊池恵楓園には、入所者の絵画クラブ「金陽会」が今もあります。

10 会に残る作品900点余りを後世に残りたいと保存活動をしているのが、熊本市現代美術館の学芸員だった藏座江美さんです。2002年、作品展の企画に携わり、金陽会の絵に衝撃を受けたのがきっかけでした。

15 入所者の高齢化が進み、人数が減ってゆく中、ほかの療養所では作品が処分されていると知った藏座さん。「このままでは、入所者の存在も生きた証しもなかったことになる」と、2015年に美術館を退職し、作品群の保存活動をおこなっています。

20 藏座さんは、初めて金陽会の絵を目にした際の強烈な印象を語ってくれました。

【藏座さん役】最初に見た絵は、木下今朝義さんの『遠足』です。青空の下、赤い帽子の子どもたちが列をつくって菜の花畑を歩き、奥には桜が満開です。6歳で発症した木下さんが

25 学校に通ったのは一年足らず。仲間と行動を共にした唯一の記憶を、82歳のときに描いたものです。

私はその絵の明るさに衝撃を受け、アトリエ中が光に包まれているような感覚を覚えました。同時に、「入所者の描く絵には恨みや悲しみがこもっているだろう」といった思い込みが自分の中にあることを突きつけられました。

30

別の作品『天草灘に沈む夕日』は、中原繁敏さんが70代で描いた絵です。33歳のときにハンセン病と診断され、入所の宣告を受けた帰り道、自殺まで考えながら見た、涙でにじんだ夕日です。

35

人生が変わった日の話を淡々と語る中原さんに、私は言葉を失いました。

40

(ナレーター) 金陽会の作品には、遠く離れた家族やふるさとを思って描いた絵だけでなく、スケッチ会で観た風景や育てている花など、日常を描いた絵もたくさんあります。また、色づかいや筆のタッチはもちろん、手作りの額縁があったり、キャンパスの裏にまで描いていたり、実物を目にして初めて見えてくるものもある、と藏座さんは言います。

45

【藏座さん役】誤った政策により隔離され、存在を消されながらも、“一人の人間”として日常を生きた人たちが確かにいた、という事実。彼らが生きた証しを刻んだ絵が、私たちに教えてくれるのです。

(本文  
9  
3  
5  
字  
)

2022年度「こころのオルゴール」